

# 新薬師寺旧境内展 ～蘇る幻の大寺院～

奈良教育大学教育資料館

# 新薬師寺旧境内の調査と復元

奈良教育大学 金原正明

奈良教育大学では、特別支援学級校舎の改築に伴う埋蔵文化財調査を、2008年に行いました。調査地は現在の新薬師寺の西約150地点で、文献や絵図から、新薬師寺の旧境内と考えられていた場所であり、遺跡地図にも約360m×約500m四方が復元範囲となっています。正倉院にある奈良時代の絵図『東大寺山堺四至図』では、三月堂真南に描かれ、調査地はその軸線に位置しました。

表土下には明治時代後半に建てられた旧陸軍聯隊の建物の煉瓦造りの基礎と日本庭園跡が検出され、その下には中近世の畑跡が検出されました。表土下約1mからは、調査区のほぼ中央部に東西に石列が発見され、基壇の化粧の石組みの最下段の延石と呼ばれる石です。延石列は東側の隅が検出され、北側に90°曲がります。西側は聯隊の日本庭園の池と構築物のため残っていませんが、北側には基壇の高まりが続き、調査区外へ西側へと続きます。中央から東側の基壇内は、後世の削平により基高まりが続き、調査区外へ西側へと続きます。東西50m以上の巨大な基壇となりました。中央から東側の基壇内は、後世の削平により基盤になる段丘礫層が露出し、礎石およびその痕跡や遺物は残っていませんでした。

西側は、礎石据付掘形と地固め石4基が確認されました。基壇は中央から東側は地山の削りだして造られ、西側は基盤礫層が落ち込み表土につらなるやや軟弱な風化土となり、方形の掘形に版築しつつ地固め石を入れ礎石据付の地業を行っています。規模は以下のようです。

## 〈基壇南面化粧石組最下部延石列〉

幅45cm。厚さ20cm、溝側は摩滅・風化して薄くなる。長さ約70cmから1m。石組み最下部の延石とみなされ、壇上積み基壇となります。凝灰岩は二上山（二上層群）のものです。

## 〈雨落ち溝および玉石〉

幅60cm。深さは10cmほどで、底面は延石の下面とほぼ同じであるが、廃絶時は半分程度堆積し、上部は瓦や土器類が堆積していました。玉石は場所により大きさが異なります。岩石は基盤礫層の花崗岩、片麻岩、三笠安山岩を用いています。

## 〈礎石据付掘形と地固め石〉

最大のもので一辺2.9mあり、他は一辺2.7mあります。深さは最深で約50cm残存しています。版築を施し、人頭大の地固め石を入れてあります。桁行は4.5m（15尺）、梁間は3.9m（13尺）になると測られます。

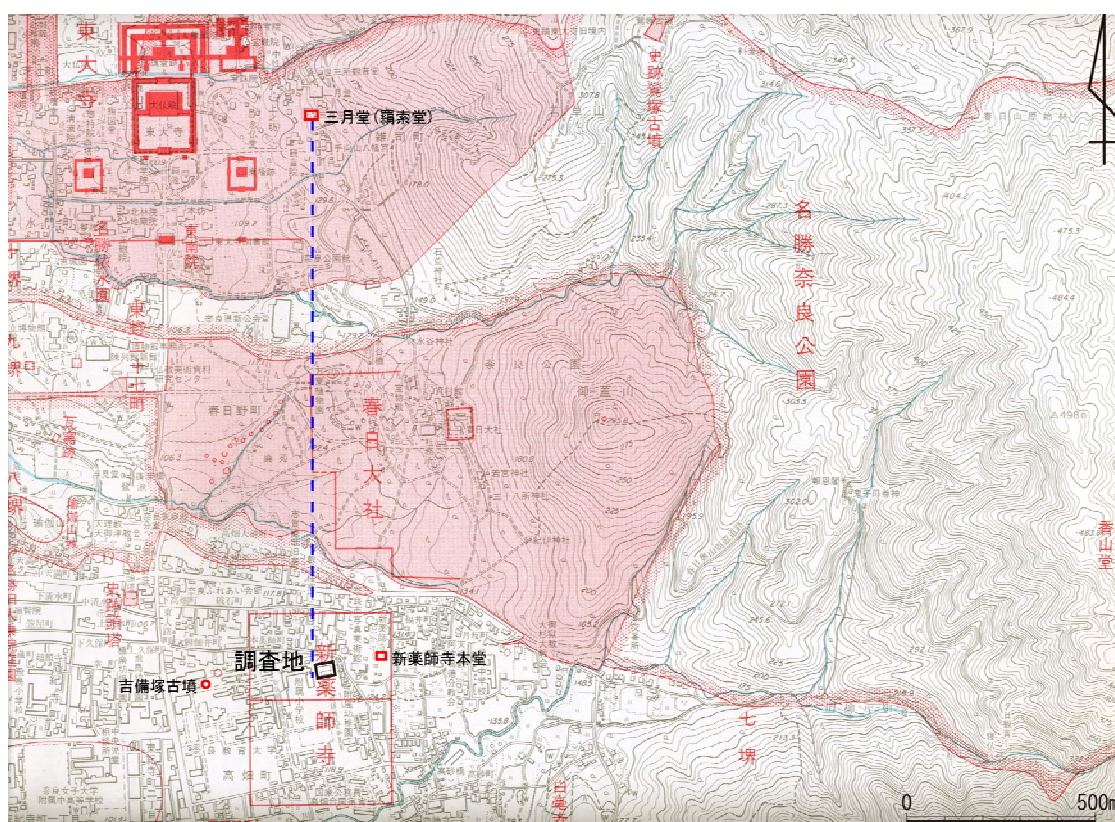
## 〈出土遺物〉

遺物としては、雨落ち溝から創建時とみられる8世紀中頃の複弁八葉蓮華紋軒丸瓦や、均整唐草紋軒平瓦、奈良三彩片、10世紀の灯明皿（とうみょうざら）片が出土し、10世紀中頃の廃絶の記録とよく一致します。

その後、確認調査を行った結果、東南隅の延石列の後方北側に新たに東へ延びる基壇化粧石組の凝灰岩列が検出された。延石上部の地覆石が東西約4m検出され、を測りまで残り、さらに東へ延びています。地覆石は幅約40cm高さ30cmあり、内側には羽目石がのる切れ込みがあります。南側前方の延石列は後方の列に取り付く形となり、後方の地覆石と延石列が基壇本体の南側前面の化粧石組みとみなされ、南側の延石列は張り出し部となり、階段になると考えられます。復元すると基壇と建物の大きさは、中

央3間が17尺(5.1m)、その両側4間が15尺(4.5m)、両端の1間が13尺(3.9m)となり、身舎で約59m、廂を入れると基壇と同じ約68mの幅が推定されます。階段の推定幅約52m。今回の確認調査で、大仏殿に次ぐ大きさは変わらないが、さらに大きくなり、身舎の前面がすべて階段となることが明らかになりました。雨落ち溝の遺物には、木屎漆に黒漆が施した乾漆像片とみられるものが検出されました。

基壇は、延石下面から東側の地山削りだしの残存部の最上面の比高差が1.5mであり、階段部が1.8mで、延石を入れると2.2mあり、2m前後の基壇の高さが推定されます。大きさと基壇の高さから金堂と考えられますが、新薬師寺の七仏薬師金堂は、正倉院にある奈良時代の絵図『東大寺山塚四至図』では、7間、東大寺要録には新薬師寺仏殿9間とあり、復元では建物13間、身舎で11間となり、より大きくなってしまいます。講堂の可能性としては、基壇の高さ、壺地業の大きさ、南前方45m内に金堂に相当する基壇が存在しない、東大寺の講堂より大きくなるなど、講堂にはならないと考えられます。



周辺遺跡地図、東大寺、三月堂、香山堂との位置関係



東大寺 新薬師寺

『東大寺山塚四至図』の中の東大寺と新薬師寺堂

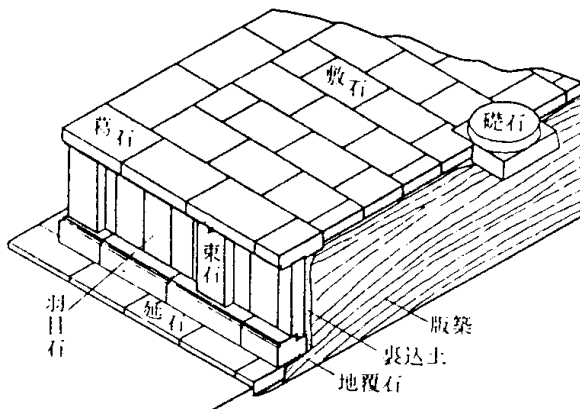




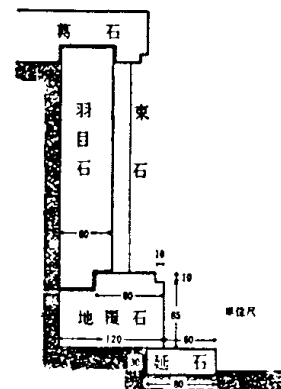
調査地と周辺航空写真



(上) 全景



興福寺食堂壇正積基壇模式図



同断面図

壇正積積基壇の構造例



礎石据付掘形、地固め石



奈良三彩

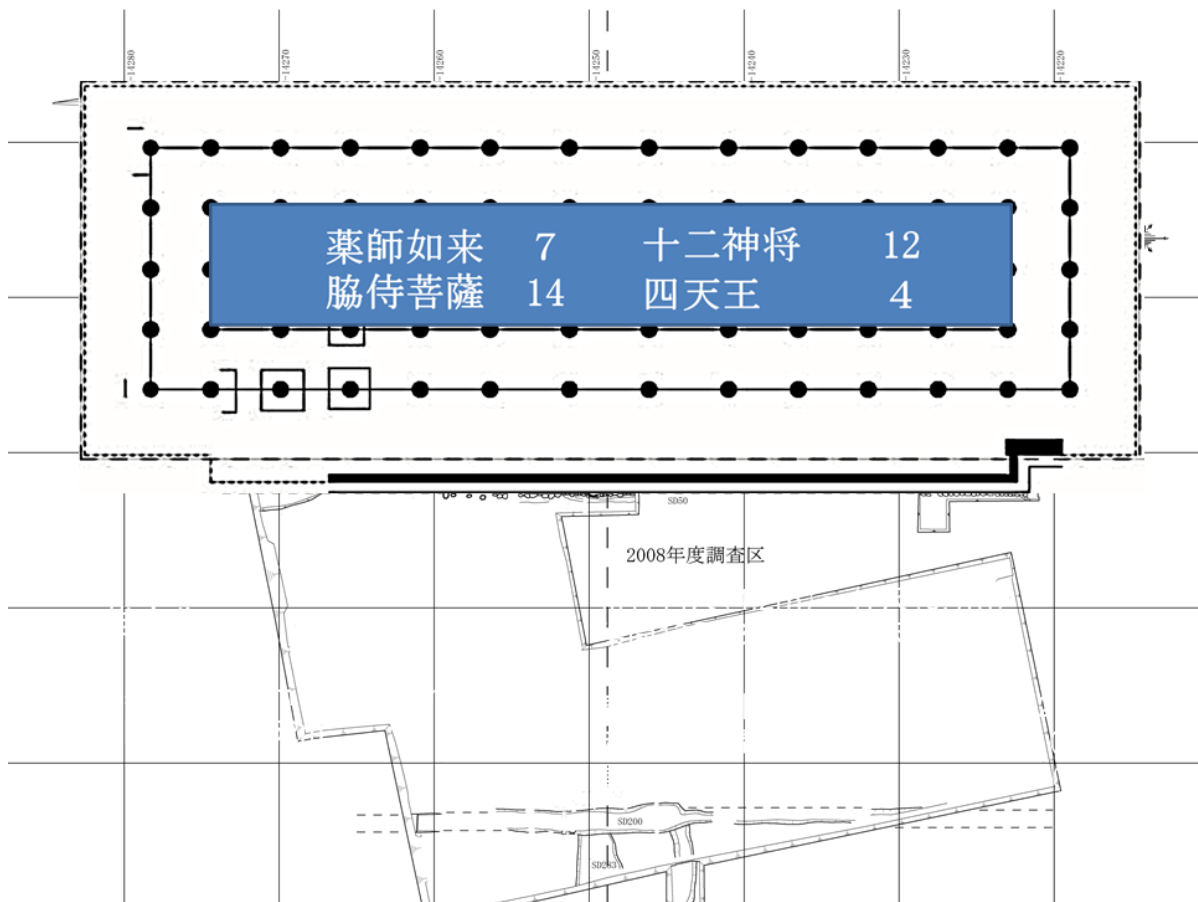


須恵器 薬壺


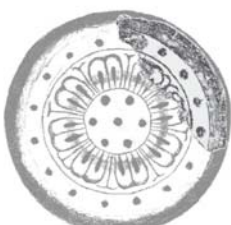

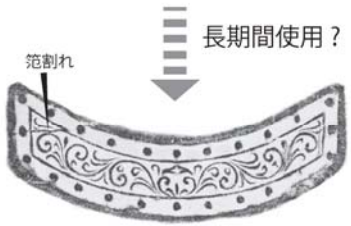
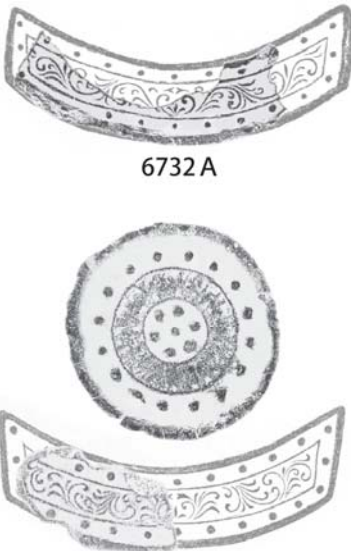






基壇東南部



調査区と基壇建物推定図

大型基壇建物（金堂） 創建期	第Ⅱ—Ⅲ期	 <p>金堂所用 6301 I - 6671 J</p>	<p>《新薬師寺関連連略年表》</p> <p>745 (天平 17 年)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>747 (天平 19) 年 新薬師寺と七仏薬師像を造立と伝える (『東大寺要録』)</li> <li>751 (天平勝宝 3) 年 新薬師寺で続命法による設齋行道が修される。</li> <li>756 (天平勝宝 8) 年 七仏薬師金堂が描かれる『東大寺山堺四至図』成立</li> </ul>
	第Ⅲ期	 <p>6235 Ma</p>	
伽藍整備期	第Ⅳ期	 <p>金堂所用 6235 G - 6732 Fb</p> <p>長期間使用?</p> 	<p>757 (天平宝字元年)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>762 (天平宝字 6) 年 東大寺造営修理塔寺料千戸のうち百戸を新薬師寺の塔・仏殿・僧坊等の供養修造料に宛てる。</li> <li>763 (天平宝字 7) 年 この頃、新薬師寺の金堂、壇院、薬師梅過所、政所院、温室、造仏所の存在が記載される。</li> </ul>
	第Ⅳ期	 <p>6732 A</p> <p>6234 Aa - 6732 D (推定)</p>	
伽藍補修期	第Ⅴ期	 <p>6236 E SYM02 (新型式)</p> <p>SYH02 (新型式)</p>	<p>770 (宝亀元年)</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>772 (宝亀 3) 年 新薬師寺総供養</li> <li>780 (宝亀 11) 年 新薬師寺西塔焼失</li> <li>781 (宝亀 12) 年 新薬師寺修理</li> </ul>
	平安時代前・中期	 <p>手彫り SYH01 (新型式)</p> <p>6801 A</p>	<ul style="list-style-type: none"> <li>962 (応和 2) 年 台風により金堂倒壊</li> </ul>

第 57 図 新薬師寺金堂地区の軒瓦変遷図

〈新薬師寺関連略年表〉	〈歴史略年表〉
	724年 聖武天皇の即位 729年 長屋王の変 737年 藤原四兄弟、武智麻呂・房前・宇合、麻呂、天然痘で死去 738年 橘諸兄右大臣、吉備真備、僧玄昉を重用 740年 9月、藤原広嗣が、大宰府で反乱 10月、聖武天皇は、突然東国に行幸を開始。伊賀、伊勢、美濃、近江を巡り、山背・恭仁郷に到着し、そのまま都とする
天平13年(741) 国分寺、国分尼寺建立の詔	
天平15年(743) 盧舍那仏金銅像の建立の詔	742年 紫香樂宮が営まれ、行幸がしばしば繰返され
天平17年(745) <u>聖武天皇不予にあたり、京師および諸国に高六尺三寸の七仏薬師像の造立を命ずる(『続日本紀』)</u>	743年 橘諸兄左大臣、墾田永年私財法 744年 難波を皇都と定める 745年 平城に帰着し、平城京が再び都となる
天平19年(747) 東大寺、法華寺を建立する <u>聖武天皇不予のため、光明皇后が新薬師寺を建て、七仏薬師像を造立(『東大寺要録』)</u>	749年 孝謙天皇即位、藤原仲麻呂(後に恵美押勝に改名)の専横
天平勝宝2・3年(750.751) <u>七仏薬師像のための朱紗以下顔料、金箔を奉納(『正倉院文書』)</u>	
天平勝宝3年(751) <u>太上(聖武)天皇病氣平癒のため、新薬師寺で続命法による設齋行道が行われる(『続日本紀』)</u>	
天平勝宝4年(752) 大仏開眼	752年 淳仁天皇即位
天平勝宝8年(756) <u>『東大寺山堺四至図』成立。新薬師寺堂として七仏薬師金堂が描かれ、この年までに造営</u>	756年 聖武太上天皇死去
天平勝宝9年(756) 唐招提寺造営	
天平宝字6年(762) <u>新薬師寺七仏薬師像の白臺、光背など制作(『正倉院文書』)。</u> <u>東大寺造営修理塔寺料封一千戸のうち百戸が新薬師寺に施入され、塔・仏殿・僧坊等の供養修造料に充てられる(『東大寺要録』)</u>	760年 光明皇后死去。孝謙上皇、弓削道鏡
天平宝字7年(763) <u>新薬師寺七仏薬師像の脇侍菩薩、神王像(十二神将像)造立。この頃、金堂、壇院(壇所)、薬師悔過所、政所院、温室、造仏所(造丈六像所)の存在が記載される(『正倉院文書』)。</u>	764年 称徳天皇重祚、藤原仲麻呂の乱、削道鏡太政大臣、吉備真備右大臣
天平宝字8年(764) <u>西塔の存在が知られる(『正倉院文書』)</u>	
天平宝字9年(764) 西大寺造営	
宝亀3年(772) <u>新薬師寺の総供養に東大寺から資材を借りる(『正倉院文書』)</u>	
宝亀11年(780) <u>新薬師寺西塔焼失(『続日本紀』)。</u> <u>新薬師寺仏殿九間とあり、西塔以外に金堂・講堂も焼失とあるが(『東大寺要録』)、葛城寺の記事に引かれた記事の可能性あり</u>	
応和2年(962) <u>大風により、七仏薬師堂(金堂)等堂舎顛倒、他に東大寺南大門等も倒壊(『東大寺要録』)</u>	794年 平安遷都